

眞実教の開頭

——『大無量寿経』の仏教史観——

松原祐善

一 弥陀教と釈迦教

『教行信証』の「教巻」の初めに

大無量寿経

眞実之教
浄土眞宗

という標挙の文がおかれている。而してその文の浄土眞宗をうけて、

「謹んで浄土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について眞実の教行信証あり。」

と述べて、浄土眞宗に二廻向・四法の教相が仰がれているのである。即ち浄土眞宗は如来の廻向にはじまり、その往相・還相の廻向を主軸に眞実の教・行・信・証の四法あることがいわれるのである。次いで標挙の文の眞実の教とあるのを抑えて、

「眞実の教を顕さば、則ち大無量寿経是なり。」

と換言されている。「大無量寿経是也」とは、一応は方便の教として後の「化巻」に説かれる『観無量寿経』・『阿弥

陀經』に対して、『大無量壽經』を真実教として選ばれたのであろうかと思われる。而してこの『大無量壽經』の大意を明かして、

「弥陀誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀みて選びて功德の宝を施すことを致す。釈迦世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯ひ恵むに真実の利を以てせむと欲すなり」

と述べられてくるのである。この大意釈は法然の『無量壽經釈』によれることがいわれるが、しかしそれには

「大意トハ、釈迦無勝浄土ヲ捨テテ、此ノ穢土ニ出タマフコトハ、モト浄土ノ教ヲ説テ衆生ヲ勸進シテ、浄土ニ生ゼシメンガタメナリ。弥陀如来穢土ヲ捨テ彼ノ浄土ニ出タマフコトハ、モト穢土ノ衆生ヲ導キテ、浄土ニ生ゼシメンガ為ナリ。是レ則チ諸仏ノ浄土ヲ出デテ、穢土ニ出タマフ御本意ナリ。善導ノ釈ニ云。釈迦ハ此ノ方ヨリ発遣ス云云。是レ則チ此ノ經ノ大意ナリ。」(石井教導編『法然上人全集』六七頁)

とありて、善導の指南により釈迦は発遣の教主、弥陀は招喚の教主としての二尊教が語られているが、いまの親鸞の大意釈では釈迦・弥陀の順序が弥陀・釈迦の次第に転ぜられている。この順序の転換に親鸞における『大無量壽經』の仏教史観あることが窺われるのである。ともかく、この親鸞の大意釈は、弥陀教については『大無量壽經』所説の「三誓偈」の文により、釈迦教についてはこの經所説の発起序の經文により、釈迦の出世本懐が述べられている。思うに一經の大意といえば、その經の一部始終の法門を簡潔な文字におさめて、その經の主旨を表わさんとするものである。親鸞の場合はこの經文を以てよくその意を尽せるものといわねばならない。弥陀誓を超発して広く法蔵を開くとは、阿弥陀仏の四十八願の建立を語り、選んで功德の宝を施すとは南無阿弥陀仏の名号廻施の義であることが思われる。釈迦仏の道教を光闡したもうとあるのは、一代仏教を指したもうのであるが、そのなか如来の出世本懐はひとえに群萌の救済にあり、しかも衆生に真実之利を恵まんと願われているのである。真実の利とは言うまでもなく、こ

の経に説く阿弥陀仏の本願海であり、誓願の一仏乗である。かくてこの大意釈を結ばれて

「是を以て、如来の本願を説くを経の宗致と為す。即ち仏の名号を以て経の体と為るなり。」（教巻）

という、この経の宗体釈が置かれている。「行巻」所引の憬興の『述文賛』によれば、『大無量寿経』上下二巻を、上巻は如来浄土の因果を説き、下巻は衆生往生の因果を説くものとして、この経の内容を大きく二つに科しているのである。いま上巻の如来浄土の因果は法蔵菩薩の四十八願におさまり、下巻の衆生往生の因果は聞其名号信心歡喜の本願成就文におさめられるようである。この宗体釈はまた上の大意釈を結べるものであるが、また本願成就文の聞其名号を釈する「信巻」末の領解である

『経』に「聞」と言ふは、衆生仏願の生起本末を聞きて疑心あることなし、これを聞といふなり。「信心」と言ふは、則ち本願力廻向の信心なり。「歡喜」と言ふは、身心の悦子の兒を形はすなり。「乃至」と言ふは、多少の言を撰するなり。「一念」と言ふは、信心二心なきが故に一念と曰ふ、これを一心と名づく。一心は則ち清淨報土の真因なり。」

と対応するものようである。この経に説かれる如来の本願とはわれら衆生において聞其名号と、阿弥陀如来の名号を行体とし、その御名の法に於て仏願の生起本末を聞き、一念の信心を發起するところにこの経の全体が領受できるのである。いまわれわれはこの宗体釈にこの経をして経たらしむる所以のものを知らされるのである。もとよりこの『無量寿経』というこの經典が結集され文字となれることは仏滅四百年頃といわれるかもしれないが、この経に先立ちて如来の本願があり、本願に先立ちて如来の名号のありしことが窺われるのである。先立つとは必ずしも時間的に先立つことではなく、むしろその基底にあるということである。

思うにこの『大無量寿経』に開顯される本願念仏の伝灯は、『大無量寿経』をして『大無量寿経』たらしめ、仏陀

を出世せしめし所以のものである。この念仏の伝統はこの経の文字に先立ちて古いといわねばならない。すでにこの経には阿弥陀如来が世に出現されるまで、乃往過去久遠の昔、錠光如来がこの地上に出現し、無量の衆生を教化し、衆生をして皆仏道を成就せしめて滅度をとりたまうて以来、五十三仏の仏の伝統が説かれているのである。それはあたかも神話的な表現を以て語られているようであるが、阿弥陀仏の因位法蔵菩薩の発願修行の物語はそのまま久遠の歴史的背景をもつ高次の事実であることを知らしめられることである。すなわち『大無量寿経』を説く釈尊によつて、釈尊以前の仏の久遠の伝統が語られ、それが釈尊をこの世に出現せしめた背景であり、根源の歴史であることが説かれているのである。かくて『大無量寿経』に開けた親鸞の仏教史観は、仏教は釈迦にはじまるのでなく、今日の釈迦をして釈迦たらしめた久遠の歴史的背景、それが釈尊によつて、また釈尊の発遣を通して釈尊以前の仏法、仏の伝燈を照らして久遠の本仏たる阿弥陀仏の本願を開顯せる『大無量寿経』が仰がれ、その久遠の本願は南無阿弥陀仏の御名に現在し歴史的に現行しているのである。(曾我量深著『親鸞の仏教史観』参照)

二 標挙の文の位置より

さて「大無量寿経眞実之教
浄土眞宗」という標挙の文について、真蹟の東本願寺本ではこれが欠けて不明であるが、西本願寺本・高田専修寺本をはじめとして多くの古写本では「総序」の文の後におかれ、そして

顕眞実教一

顕眞実行二

顕眞実信三

顕眞実証四

顕真仏土五

顕化身土六

の六行の標列を記す前におかれている。而してこの標列はあたかも『教行信証』一部六巻の内容目次を表示するものごとく、しかもその前におかれた「大無量寿経、真実之教・浄土真宗」の標挙の文は、真実の教・行・信・証はいうまでもなく、「真仏土巻」も更に方便教たる『観無量寿経』・『阿弥陀経』の意を顕わす「化身土巻」をも加えて、『教行信証』六巻の全体が真実教たる『大無量寿経』より開顕された仏教なることを顕示されたものと思われる。げにも「顕浄土方便化身土文類六」の尾題は「顕浄土真実教行信証文類六」として結ばれているのである。ここに真実教たる『大無量寿経』に権・実、真・仮相雜わる『観無量寿経』・『阿弥陀経』等をおさめ、更に『華嚴』・『涅槃』の諸大乘經典をも包みて、『大無量寿経』の一切経としての仏教史觀の眼が開かれ、仏教三千年の仏道実践の根幹に、その仏道実践の大地として本願念仏の久遠の伝統がまさしく浄土真宗として仰がれているのである。

試みに浄土真宗とある宗名を『教行信証』のなかにたずねてみると、今の「教巻」標挙の文に「大無量寿経眞実之教
浄土真宗」とある。またその浄土真宗をうけて二廻向・四法の教相を掲げてくる「教巻」における二カ処、それに対応して「化巻」に二カ処を見出すことができる。かの三願転入の宗教的廻心の表白のあとに、

「信に知んぬ、聖道の諸教は在世・正法のためにして、全く像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は在世・正法・像末・法滅・濁悪の群萌ひとしく悲引したまふをや。」

とありて、聖道一代の諸教に相對して浄土真宗が語られている。而して聖道の諸教には正像末三時の興廢があり、すでに末法到来の今日では時を失し機に乖ける教である。それに対して浄土真宗は在世正法・像末法滅の三時を通じて濁悪の群萌をひとしく救済するところの時機相應の法なることがいわれる。今一つ『教行信証』の後序の文に、

「竊かにおもんみれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛りなり。然るに諸寺の積門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路をわきまふることなし。」

と述べて引続き承元の法難を記述することであるが、まず聖道門の諸教は行証久しく廃れて有教無人なることを告知し、浄土真宗はこの像季末法時にあたりて時機純熟して教・行・証の三法を成就円満して、証道愈々盛んなりというのである。特に専修念仏の都鄙を問わず広く庶民層への滲透は聖道諸宗にとりては大いなる恐怖であった。そこに真宗興隆の太祖法然を中心に師弟の流罪・死罪・追放の法難を惹起したのである。思うに法然の滅後、師の選択本願の本義は隠れて門下の多くは聖道諸宗との妥協におわり『選択集』付属の使命より師の教の真髓を将来に残さんとて本書の撰述となったものである。またこの後序の文に対応して遙かに総序の文を誦すれば、

「竊かにおもんみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。然れば則ち、浄邦縁熟して調達・闍世をして、逆害を興ぜしむ。浄業機彰はれて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり。これ乃ち権化の仁、済しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闍提を恵まむと欲す。」

と述べられて、浄土教の興起は釈尊在世中、『観無量寿経』説法の序文にある王舎城悲劇の事件にあったといえよう。すなわち釈迦牟尼の教団に於ける提婆・阿闍世の逆害の事件を契機として、釈尊は阿闍世王の母韋提希をして『大無量寿経』に説く阿弥陀仏の安養国を選ばしめ、念仏の浄業を修すべき機として、未来悪世の実業の凡夫を代表せしめたのである。『大無量寿経』の阿弥陀仏の本弘誓願が、現実の生死の苦海・難度の業海をわたす大船であり、この大船に乗じて、如来の無碍の光明が衆生の無明の暗黒を照破したまう久遠の慧日であることが仰がれ、実証されているのである。『浄土文類聚鈔』には

「情ら彼を思ひ、静かに此を念ふに、達多闍世博く仁慈を施し、弥陀・釈迦、深く素懷を顕せり。」

とも述べられて、韋提希の往相自利の廻向に対して提婆・阿闍世の逆害は、還相利他の廻向の活動をなしたもう大権の聖者の働きであると仰がれているのである。われわれの往相自利をあらしむる歴史的背景には、浄土の菩薩の還相利他の働きがあり、この往相、還相の二種の廻向によって『無量寿経』の浄土の史観が開かれるといつてよいであろう。かくて南無阿弥陀仏の本願救済の久遠の歴史は永遠の未来、末法万年の百歳、法滅の末かけて五逆・謗法、闍提の難治の三機を救わんと願われてあるのである。

三 浄土真宗の教相について

法然の『選択本願念仏集』は日本における浄土門仏教の独立の宣言書であるだけに、第一の「教相章」には、

「道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、而も聖道を捨てて正しく浄土に帰するの文」

と標題し、『安楽集』上巻より聖道・浄土二門の教判を引用されている。而して浄土宗という三字の宗名を掲げて、次いで正しく往生浄土を明かす教として「三経一論」が決定されている。「三経」とは一に『無量寿経』二に『観無量寿経』三に『阿弥陀経』であり、「一論」とは天親菩薩の『浄土論』を以てしている。

それに対して親鸞の『教行信証』では法然上人の「浄土宗」の三字の宗名は「浄土真宗」の四字の宗名として仰がれている。『源空和讃』にも

本師源空世いでて 弘願の一乗ひろめつつ

日本一州ことごとく 浄土の機縁あらはれぬ

智慧光のちからより 本師源空あらはれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ

善導源信すすむとも 本師源空ひろめずば

片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとらまし

とありて、浄土真宗の四字宗名は真の一字を加えて法然の選択本願の正意をあらわすものとしている。『末灯鈔』第一章にも

「浄土宗のなかに真あり仮あり。真といふは選択本願なり。仮といふは定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。」

と述べられている。この真宗というについて『六要鈔』をはじめとして従来は一、内・外対。二、聖・淨対。三、要・弘対として理解されてきている。第一の内・外対とは、内教とは仏教であり、外教とは孔・老等の外教をさしている。仏法は内教として転迷開悟の機能ある故に真宗と呼び、外教は世間の道德は説くも出世間の道理を知らざるものとして誠ましめられている。第二の聖・淨対は仏教のなか聖道門は権仮の方便であり、浄土門を真宗とする。すなわち浄土即真宗である。第三の要弘対とは、浄土門のなかに真実と方便を簡び、三願三經三機三往生の三々の法門を施設して『大無量寿經』を真実教とし、『観無量寿經』・『阿弥陀經』を方便教とし、真実教たる『大經』は第十八願の弘願真宗を開顯するものであり、『観經』は第十九願の浄土方便の要門を開顯する經であり、『阿弥陀經』は第二十願の方便の真門を開顯して、要門の機・真門の機をして第十八の選択本願、弘願真宗に転入せしめんと願われているのである。

さて『教行信証』では、先述の如く「教卷」劈頭に

大無量寿經 真実之教
浄土真宗

と標挙し、それをうけて

「謹んで浄土真宗を按ずるに、二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の廻向について真実の教行信証あり。」

と述べて、浄土真宗に二廻向・四法の教相あることがいわれている。

次いで行・信の両卷には、そのはじめに

「謹んで往相の廻向を按ずるに、大行あり大信あり」

とあり、「証卷」の中頃に「教卷」以後の往相廻向についての解明を終えて、

「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲廻向の利益なり。かるがゆへに、もしは因もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の廻向成就したまへるところにあらざることあることなし。因淨なるが故に果また淨なり。」と結ばれて、筆を改めて

「二つに還相の廻向と言ふは、利他教化地の益なり。」

と述べられてくる。そして還相廻向についての叙述を終えて「証卷」の終りに

「しかれば大聖の真言、誠に知んぬ、大涅槃を証することは願力の廻向によりてなり。還相の利益は利他の正意を顕はすなり。……宗師は大悲往還の廻向を顕示して、ねむごろに他利利他の深義を弘宣したまへり。仰いで奉持すべし。ことに頂戴すべしと。」

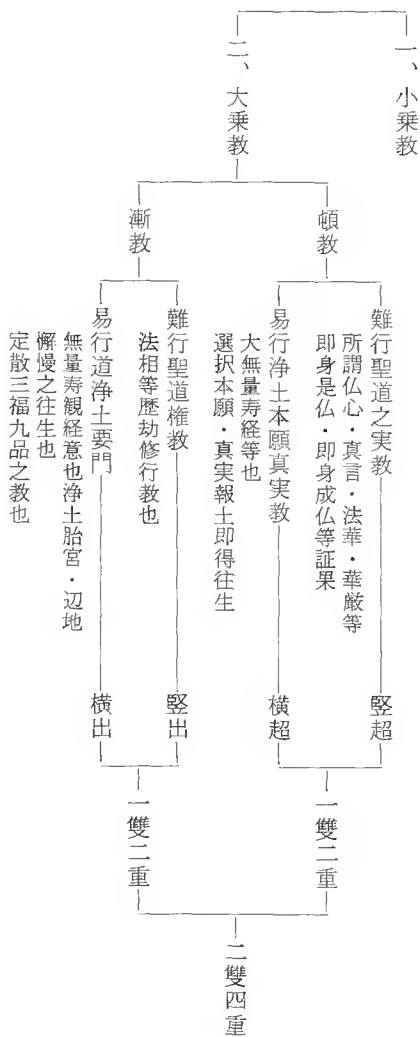
と総結されている。かくて真宗の教相は如来の二種廻向の教行信証という純粹無二の仏法がここに開示され仰がれているのである。

村上專精師の『愚禿鈔の愚禿草』に

「『愚禿鈔』は真宗成立の根本宝典である。されど真宗は此の『愚禿鈔』に依りて成立したとは言へぬ。何故な

れば『愚禿鈔』は釈迦教に就ての教相判釈なるが故である。然るに『教行信証』は弥陀教に就ての教相判釈である。故に真宗は『教行信証』に依って成立するといふことを得るのである。弥陀教の上に成就する所の教相は実に真宗の生命である。此の教相を離れて外に真宗あることなし。故に真宗教法は挙てこの教相を維持すべき責任を有するものである。」(『愚禿鈔の愚禿草』一二八頁)

と述べられているが、因みに『愚禿鈔』の二雙四重の教判を図示すれば、



師は『教行信証』と『愚禿鈔』との教判を比較して、①『教行信証』は宗名より開けた教相、『愚禿鈔』は大乗・小乗中、大乘教の中より起った教相。②『教行信証』は弥陀の本願より起った教相、『愚禿鈔』は釈迦の説教より起った教相。③『教行信証』は絶対の嶺より相對の谷に下らんとする教相、『愚禿鈔』は相對の谷より絶対の嶺に上ら

んとする教相であると説明している。而して更に

「弥陀教立宗の旨を明白に語るものは『教行信証』である。本書を除いて外に弥陀立宗の旨を斯く明白に示すものは恐らくあるまい。聖人已証の肝要は此に存するのだ。恩師源空未だ之を明白に語らず。善導大師既にその旨を示すと雖も之を大成するに至らなんだ。能くその意を得て之を立証し、以て弥陀立宗を釈迦教立宗の中に大成せられしは実に聖人の功績である。後世仰いで浄土真宗の祖師となす所以実に此に存するのだ。」(『愚禿鈔の愚禿

草』一二五頁)

と強調されている。浄土真宗と仰ぐ『大無量寿経』史観の仏教は、二雙四重の教判や要・真・弘の真假分判を通して新しく開け来りしこと、また浄土真宗は釈迦以来の印度・中国・日本の三国七高僧の歴史的伝統を以て内に証明され展開されてきたことである。

四 真宗の他力廻向義をたずねて

前述のごとく『選択集』において浄土宗の正依の経・論として三経一論が決定されてきたのであるが、これは古くは中国の曇鸞の『往生論註』に、天親の『浄土論』を註解して三経通申の論と解し、この曇鸞により既に浄土の三部経が選びとられ、この三経の伝統に立ちて、天親の一論である『浄土論』、詳しくは『無量寿経優婆提舍願生偈』の註解を述作されたのである。この三部経の伝統が曇鸞によりて選びとられたところには重大な歴史的意義がある。かくて曇鸞によりて開顕された浄土教が、廬山の慧遠をはじめとする曇鸞以前の諸師・また同時代、それ以後における諸師の浄土教と異なる所以は、まさしく浄土の三部経の伝統に立ることにあると思われる。しかも曇鸞は天親の『浄土論』を註解しているのであるから、三経一論の教学は既に曇鸞によりて世に掲げられているのである。法然の依ると

ころの唐の善導もそれを承けて、五正行中に第一の説誦正行を語るときは浄土三部経の説誦に限っている。この曇鸞にはじまる純正浄土教の伝統に立ちてそれを承けて法然の三経一論の選定があったことと思われる。しかるに三経一論を語る『選択集』には何故かその一論たる『浄土論』並び『往生論註』について触れるところがない。この『浄土論』の課題は恐らく法然は親鸞に譲られたのであろうと思われる。『教行信証』においては『浄土論』は「信巻」・「証巻」・「真仏土巻」に多く引用されて、『教行信証』の教学においては最も重要な役割を荷負うているのである。

ここにわれわれは「教巻」劈頭の浄土真宗に仰がれる二廻向・四法について、特にそのよるところの他力廻向義についてたずねてみたいと思う。まず他力については「行巻」の他力積（追釈要義）に、

「他力と言ふは、如来の本願力なり。」

とありて、曇鸞の『論註』巻下の『論』の利行満足章（「菩薩如是修・五門行・自利利他速得・成・就阿耨多羅三藐三菩提・故」）の註釈を引用されてくるのである。そのなかに

「覈にその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。」

といわれ、更に

「凡そ是れ彼の浄土に生ると、及び彼の菩薩・人・天の所起の諸行は、みな阿弥陀如来の本願力に縁るが故に。」

といい、十八、十一、二十二の三願を引用して増上縁の具体的な内容を明らかにしている。

次いで廻向の意義について、これを『教行信証』に求むれば「信巻」の欲生釈に、本願成就文を引用して、

「是を以て本願欲生心成就の文、経に言はく、至心廻向したまへり。かの國に生れむと願ずれば、即ち往生を得、

不退転に任せむと。ただ五逆と誹謗正法とを除くと。」

とあり、次いで曇鸞の『往生論註』巻下より引用して「信巻」に

「浄土論に曰く「云何んが廻向したまへる、一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首として大悲心を成就することを得たまへるが故に」とのたまへり。廻向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相とは、おのれが功徳を以て一切衆生に廻施したまひて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまふなり。還相とは、彼の土に生じりて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して共に仏道に向へしめたまふなり。もしは往もしは還、皆衆生を抜きて生死海を渡せむがためにとのたまへり。この故に「廻向為首得成就大悲心故」とのたまへり。」

と述べられ、次いで『論』の浄入願心章、『論』の出第五門積の『註解』を引用され、それに次いで善導の『散善義』の廻向発願心積を引用している。

「また廻向発願して生るるものは、必ず決定真心の中に廻向したまへる願を須いて得生の想を作す。この心深く信ぜることなほ金剛のごとくなるに、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。」と述べられてくるのである。

さて右の引用よりしても、親鸞の他力廻向義はその教義的な根拠は曇鸞の『論註』によれることが明らかではあるが、『六要鈔』第一には前引の『論註』下巻末の要求其本積、他利利他の深義を以て「今家特立如来他力廻向之義專依此文」と述べている。しかし『論註』の上ではどうしても他力と廻向とは直ちに結びつかないのである。曇鸞が廻向の名義を積するに「善巧撰化章」に、

「凡そ廻向の名義を積せば、謂く己れが所集の一切の功徳を以て一切衆生に施与して共に仏道に向むるなり。」とありて、『論註』の当分では五念門中の廻向は行者の所修となっている。親鸞の他力廻向義は親鸞の己証であって、少くとも『論註』にその教理的根拠が見出されてくるのに先立ちて、法然・善導の教学に導かれていることが思われ

てならない。『教行信証』の「行巻」に、

『選択本願念仏集』に云く、「南無阿弥陀仏、往生之業には念仏を本とす」と。又云く、それ速かに生死を離れむと欲はば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門をさしおきて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らむと欲はば、正・雑二行の中に、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せむと欲はば、正・助二業の中に、なほ助業を傍にして、選びて正定を専らすべし。正定の業とは即ちこれ仏の名を称するなり。称名は、必ず生れむことを得。仏の本願に依るが故に。」

とありて、法然の『選択集』の題号と撰号、巻頭の総標の文、次いで『選択集』総結の三選の文とを引用して、あたかも『選択集』の始終を尽してここに引用される趣旨が窺われるのであるが、それをうけて親鸞の私釈には

「明かに知んぬ、これは凡聖自力の行にあらず。かるが故に不廻向の行と名づくるなり。大小の聖人・重軽の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して念仏成仏すべし。」

と領解されている。法然では念仏は不廻向の行といわれるのである。不廻向とは無廻向ということではない。自力の廻向を要とせぬということである。『選択集』の「二行章」に正・雑二行について五番の相対があげられ、その第四が廻向・不廻向対である。雑行(諸行)は「若し廻向を用ひざる時は往生の因と成らず」とあり、正行(念仏)は「別に廻向を用いざれども、自然に往生の業と成る」と言い、更に善導の名号六字釈をあげてその不廻向の義の根拠としている。すなわち南無帰命に発願廻向の義あるによって、念仏それ自体が如来の廻向心の表現である。自力の廻向にあらざるが故に不廻向と名くることがいわれ、そこに如来の廻向と不廻向は同義なることが知られるのである。『浄土文類聚鈔』には「大悲廻向の行なるが故に不廻向と名く」といわれている。『選択集』における法然の教示はどこまでも不廻向の行であった。親鸞はこの不廻向の義を推求することにより願力廻向の自然の大道が開けてきたものと思

われる。また『歎異抄』の信心一異の問答に、師法然の仰せとして

「源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまはらせたまひたる信心なり。さればただひとつなり。」

との言葉を伝えている。他力信とは単なる他力（仏力・神力）を依頼する信というのではなく、他力廻向の信であること、信心そのものが如来の廻向であること、如来より賜りたるもの、如来廻施のもの、本願力廻向の信なのである。それは自力の発起でなく、自力の廻向をすてはてて、ひとえに如来の廻向に帰入すること、如来より賜りたる信としての自覚、その信が如来選択の願心より発起せるところに、他力金剛不壞の信たるの自覚・自証があるのである。

五 真宗教相の根源

それについて我々は更に善導の『観経疏』の三心積による指導を思うのである。善導の三心積中に特に目立つのは第一至誠心積における親鸞已証の訓点である。しかし善導の疏文を幾度か拝読すると、親鸞の訓点こそよく善導の真意を開顯せるものであることが思われる。

『経』に云く、「一者、至誠心」。至とは真なり。一切衆生の身口意業の所修の解行、必ず真実心の中に作したまひしを須いふことを明かさむと欲ふ。外に賢善精進の相を現ずることを得ざれば、内に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽奸詐百端にして悪性侵め難し、事蛇蝎に同じ。三業を起こすといへども名づけて雑毒の善とす、また虚仮の行と名づく、真実の業と名づけざるなり。」

善導は至誠心を字訓して真実心といわれる。ただ至誠心といえば、広く仏教・儒教・神道にも通じ、世間道徳として処世の第一義として至誠心が何よりも求められている。されどこの至誠心が人間において終始一貫することは容易で

はない。いまこれを字訓して真心と換言されるときは、人間にはもはやなき心である。真心とは虚偽・虚妄の絶無の心である。凡夫は蛇蝎奸詐のこころ虚偽虚妄の心が充ちているのである。すなわち真心は如来のみにいわれる心である。しからばわれわれは如何にして眞実の人となることが出来るのであろうか。存覚の『六要鈔』第三(本)では、

「然らば賢善等の相を現せず、自心三毒の悪性を識知して自力の行を捨て他力の行に歸して、眞実清淨の業を得べきなり。此の心を勸むるを以て今の積の要と爲す。」

と述べられて、罪惡深重・貪瞋邪偽の凡夫が如何にして清淨眞実の行業を得ることが出来るか明らかにされている。ここに自力の行を捨てて、必ず如来真心心中に作し、施与したまえるをもちいて、如来廻向の他力の行を仰いで清淨眞実の行人となりうることを示すが、この至誠心積の至要とするところというのである。

次に深心積である。

「二者、深心」。深心と言ふは、即ちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して、出離の縁あることなしと信ず。二つには決定して深く、かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を攝受して疑ひなく慮りなく、かの願力に乗じて定んで往生を得と信ず。」とありて、この二種の深信を『愚禿鈔』下巻では、

「今斯の深信は、他力至極之金剛心、一乘無上之眞実信海也。」

と讃仰し、

「第一の深信は、決定して自身を深信する、即ち是れ自利の信心也。

第二の深信は、決定して乗彼願力を深信する、即ち是れ利他の信海也。」

とされている。次いで第三の廻向発願心積である。『愚禿鈔』巻下では

「廻向発願心と言ふは二種あり。

一には過去・今生・自・他所作の善根、皆眞実の深信心の中に廻向して彼の國に生ぜんと願するなり。

二には廻向発願して生ずる者は、決ず決定して眞実心の中に廻向せしめたまへる願を須ひて得生の想を作すなり。」

と述べられている。前積と後積では廻向の意義が全く異なるようである。『六要鈔』第三では前積は廻因向果の自利の廻向、即ち自力の廻向の義とし、後積は廻思向道の利他の廻向の義としている。すなわち前者は自利の善根功德を廻向して淨土に生まれんと願うのであり、後者は願生淨土の想を為すことが利他の廻向によることであり、如来の眞実心中に廻向したまえる願を須いて即得往生の想いをなすことである。そこに自力のはからいを離れて本願他力の大道に帰せる、廻思向道の廻向義があるのである。善導は更に廻向について廻入向利の還相廻向の義を述べて、

「又廻向と言ふは、彼の國に生じ已て還つて大悲を起し、生死に廻入して衆生を教化するを亦廻向と名づくるなり。」

といわれている。廻入向利とは廻入は自利であり向利は利他である。往相自利より還相利他に向うのである。もとより往還ともに如来の廻向であり、「往相廻向の利益には還相廻向に廻入せり」である。往相・還相の二廻向の名目はもとより曇鸞の『論註』に出ずるところであるが、善導はそれをうけて還相廻向の領解は曇鸞の解釈よりも更に簡潔となっている。親鸞の『高僧和讃』（天親讃）に

願土にいたればすみやかに、無上涅槃を証してぞ

すなわち大悲をおこすなり これを廻向となづけたり

とあるのは、善導の領解を通して還相廻向の利益を詠われたものである。

以上「信巻」引用の善導の三心積に他力廻向義を求めたのであるが、それらの指導によって二廻向・四法の教相が仰がれきたる根源のものとして、われわれは『大経』下巻の本願成就文に思いついたのである。特にそのなか本願の欲生心成就の文にあることが思われる。本願成就文は親鸞の「信巻」本における三心積には、その前半の

「諸有衆生、其の名号を聞きて信心歡喜せんこと、乃至一念せん。」

の文は本願信心の願成就文と呼ばれ信楽積のもとにおかれ、後半の

「至心に廻向したまへり。彼の國に生ぜん願せば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と正法を誹謗するをば除く。」

の文は本願欲生心成就の文として欲生積のもとにおかれている。かつて『愚禿鈔』上の、「本願を信受するは、前念命終なり」「即得往生は、後念即生なり」とある文に照応して、曾我量深師は「信に死し、願に生きる」と領解された。自力の心を離れて如来の本願に帰する信楽の一念に前念命終があり、この至心信楽を体としてその根源である如来本願の欲生心に招喚覚醒して起つところに、後念即生があり、如来の本願に生きるのである。願生彼國即得往生とは如来本願の欲生我國の廻向心に応えられたのである。彼の願力に乗托して即得往生住不退転する。まさに得生の故にこそ願生である。前念命終してはじめて往生浄土の大道が開けたのである。そこに後念即生があり、後念相続がある。わが身は罪業の身であり、おかれている環境は娑婆であるが信心の人にはその心境として浄土が開けてあるのである。もとより娑婆即寂光土であるというのではないが、浄土が娑婆を超えて娑婆を包み、彼の浄土が此の娑婆に映されている。而して浄土に生れることはまた浄土を生きることであると言わねばならない。真宗の二廻向・四法の教相はこの如来本願の欲生心すなわち如来の廻向心に覚醒して、名号を行体として行・信・証と開け来りしものと仰ぐことが出来る。

六 今日の因縁、釈尊と阿難の値遇

かくて「教卷」においてこの経、『大無量寿経』が釈迦世尊の出世本懐の経であり、真実教たる所以を明証するものとして、親鸞はこの『経』の序分、特にその発起序の経文を以て答えられるのである。

この経文において阿難尊者は、今日の威容顕曜にして超絶無量である大聖釈迦世尊との値遇がただ事でないことを思念され、未曾見とあやしみ、生希有心と驚かれたのである。あたかも靈瑞華の三千年に一度現ずるがごとく、今日の世尊との値遇の難きこと相いまみえることの至難であることを語られるのである。阿難が永く仏辺に侍られたことも今日の因縁到来のためであったのである。しかも如来正覚の智慧海は深広無涯底である。声聞・菩薩二乗の智を以て測ることはできないのである。況んや梵天・帝釈天の神々の及ぶところではない。世尊はかねて阿難自らの慧見を以て、しかもこの如来の慧義を問えることを未来の衆生を愍念する故に讃めたまうたのである。今日の阿難はもはや単なる二乗声聞ではないのである。ここに阿難の念言とは

「今日、世尊、奇特の法に住したまへり。

今日、世雄、仏の所住に住したまへり。

今日、世眼、導師の行に住したまへり。

今日、世英、最勝の道に住したまへり。

今日、天尊、如来の徳を行じたまへり。

去・来・現の仏、仏と仏と相念したまへり、

今の仏も諸仏を念じたまふこと無きことを得ん耶。何が故ぞ、威神の光光たる乃し爾るや。」

と説かれる。この五徳瑞現の経文を唐訳の『無量寿如来会』に照らせば、世尊は大寂定阿弥陀三昧に入りて如来の徳を行じたもうである。仏陀世尊は過去・現在・未来の三世十方の諸仏如来と相念し、その所念である久遠の本仏阿弥陀如来の本願を念じたもうのである。ここに三世十方の諸仏如来の出世本懐は、この上なき無蓋の大悲を以て三界の迷える衆生をあわれみ、いたみ、かなしみ、その苦惱の群萌を救済して、恵むに一如真実の功德である阿弥陀如来の本願海を説くことにあることが、釈迦世尊の言葉を以て語られているのである。親鸞はこれこそこの『経』の顕真実教たる明証であると述べ、このことは単にこの『経』の序分に終るのではなく、この『経』の始終をおさめ、この『経』の根底となれることが思われていたに相違ない。われわれはこの『大無量寿経』に原始の阿含の仏教を超えて、それを包むところの大乗の仏教史観、仏教三千年の歴史を一貫し、真に仏教をして仏教たらしむる根源のものは何んであるかを深く思念すべきであると思う。『浄土和讃』（大経讃）には、この序説を通して

大寂定にいたりたまひ 如来の光顔たへにして

阿難の慧見をみそなはし 問斯慧義とほめたまふ

如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ

難値難見とときたまひ 猶霊瑞華としめしける

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみへたまふ

南無不可思議光仏 饒王仏のみもとにて

十方浄土のなかよりぞ 本願選択摂取する

と讃詠されたのである。